

作文指導の希望があったことは、とても喜ばしいことと思いました。私自身、もっと早くから始めていれば良かったと後悔しましたので。また、今、子どもたちを取り巻く環境はとても厳しくなり、心を痛めてしまう子どもが増えています。そういう子どもたちに作文指導がとて有効だと考えるからです。教室の穏やかな空気作りにつけてです。また、この指導法は、細かな誤りをいちいち訂正する方法をとらず、全体指導の中で身付けさせる形をとります。それも、子どもたちのやる気をそいだりうんざりさせたりしないで、良いと思うのです。

私は、作文指導では、それぞれの子どもが持つ良さ、家族の良さ、友だちとしての良さ、など、普段あまり意識していないけれども、本当はこういう良さに支えられているのだと、気付く時間になりたいと考えています。自分だけでなく皆さんの思いやりに包まれているのだと気付くことが、明日頑張る糧になると考えています。

基本はそうでも、いやいや、これだけはどうにも見過ごしてはいけない、改めた方が良くいと考えられることもあるでしょう。そういう場合は、言葉を工夫するなり、一人の場を選ぶなりして伝えていくと良いのかなあと 생각합니다。

あたりまえの大切さに気付かせる。

ここからは、私が立案するときに気を付けていることを述べます。

記述

一文話

今日の作文を書くに当たって、さあこれを書いてみようという気にさせるいい話があればそれを。特に思い浮かばなかったら、今日のネタになりそうな話を。または、この前書いた作文から、感心した作文の紹介でも良いし、全体の作文の良かったところでも良い。最後に、今日の作文で、頑張って欲しい技能を前もって伝えておく。

(時間の目安は五分くらい)

チェックする作文技能

字数

誤字

題材一つに絞ってあるか

常体、敬体の一致

接続詞の使い方

のでから(ずらずら続けた文)

文法の誤り

センテンスの長さ(短くしまった文が良い)

説明不足

主語省略

感想、考えはどれくらいあるか。

段落

書き始めの工夫

聞きなららのメモがきも入っている。

読点、句点
文字使用
方言
事実の羅列
山はあるか
等

私は、全員の作文のチェック表を作って、この子どもたちに次に必要な技能はどれかを検討しています。

全体としてほめるのは、こういう作文を書いて欲しいと思うことをほめています。

二 文題発表

今日の作文の文題を発表する。

全ては時間的に難しいので、8人くらい。

文題発表で心がけていること

- ・ 題の付け方・・・短く
 - ・ 一つの題を聞いたら、次の題に広がるように、「動物のこと」「家族のこと」「学校のこと」のようにまとめた言い方をし、ほのめかしておく。
 - ・ 書くときに焦点化しやすいように、少し様子を聞き出して置く。それとなく気持ちも、言語化しておく。
- (時間の目安は、十分)

三 記述

3マス下げて題を書く指示

名前を下に書く指示

目指す技能の指示

鉛筆の予備準備

分らないことを書いてあげるカード

後は、ひたすら沢庵石

(時間の目安は、二十分から二十五分)

書き終わり五分前に残時間お知らせ

原稿が二枚以上ある場合は、右上に番号を付け、二枚目にも名前を書く指示

批評

批評に入る前に、作品を読んで、批評に向けた準備をします。

・まず、各作文に込められた心を考えます。なぜこれを第一にするかという点、一読後
もっとも心に残るもの、そこに心が現れていることが多いからです。それが、その子
の良さにつながります。分析の表を作ってみてはいかがでしょうか。私はそうしてい
ます。

(私の表の項目は、氏名、題、内容、良さ、技能、その他です。)

・全体の作品傾向をまとめます。どのような内容の物がどれくらいかをつかみ、次にど
のような指導をするかの材料にします。

・前時の課題について、できたかどうかを確認します。

・今後の指導見通しを立てます。

・批評指導のための児童の選び出しをします。

・聴写文の選び出し(児童への依頼を断られた場合に備えて、二点選出、選出の観点、
まず、子どもたちに伝えたい大切なメッセージを持っていること、前時に指示した
技能をクリアーしていること、間違いは一つくらい、その間違いは、次に身に付け
たい技能であること、そのほかに、後で読んでもらうことを前もって伝えておき、
前日に担任を通して作品を渡しておくこと、また、児童が忘れるなど、不測の事態
に備えて、コピーは手元に置くこと。)(また、私はこの場合の良い作文とは、生
活の良さが現れている作文と考えています。そのほか、ここにご意見、ご指導いた
だけると助かります。)

優良文選び出し(二、三点、それぞれに評価文作成)

選択の視点

- ・ 意欲的に書かれた作文
- ・ 新傾向の作文
- ・ 朗読を聞いていると、学級全体がなごやかになるような作文
- ・ 作者の心情があらわれている作文
- ・ その子でないと書けないような個性的な作文
- ・ 学級全体の良さを見つける。(地域、学校、家族の素晴らしさを意識できるように)

批評授業

(原稿用紙は前もって配り、机の中へ。各自の原稿は机上に配っておく。)

一総評

- ・ 印の説明(読んだ印、お手伝いをお願いする印)
- ・ 学級全体の良さを伝える。(その良さのうち、もっとも伝えたい良さは、聴写文の良
さにつながり、全体の流れが一貫できると良い。)
- (五分くらい)

・ 笠原先生による、総評とは、例、観点

長所、短所を読み取る

例

文字が美しい 長文が多い 言葉遣いの善し悪し
題材の傾向 漢字の使用 表現の善し悪し

観点

- ①前に書いた作文よりも伸展した点を話す。
- ②文字の美しさについて(ていねいで読みやすい字を奨励する。)
- ③新傾向の文題について(題広げ)
- ④作文に対する意欲のあらわれについて(たくさん書いた、一生懸命書いた、真剣に書いた)
- ⑤工夫のあとについて
- ⑥面白い表現について(子どもらしい面白い表現、大人がまねすることの出来ない表現)
- ⑦真剣さ
- ⑧形式について

二点呼

- ・読んでいて面白いなど思った文を紹介する。(十分くらい、十人以内目安)
- (作文を書いた人の名前、題名、内容、コメント、同じような題で書いた人の人数や名前を紹介)

三優良文朗読(五分くらい)

- ・児童に読んでもらい、それぞれにあっさり評を述べる(良さを伝える)。感想は訊かない

四批正文聴写(十分から十五分)

- ・自分の作文は机の中にしませ、原稿用紙を出させる。
- ・教師が読み上げるのを聞きながら、書くことを知らせる。
- ・おしまいに、自分の名前を書かせる。

五細評(十分)

- ・作文を書いた児童に、自分の作文を持って読ませる。(縦無し)
- ・長所、短所を挙げて、鑑賞、訂正させる。
- (区分、事実確認、良さ)

六よむ

全員で指音読

一 作文指導の学年の目安

- 一年生の作文・・・事実の羅列されている作文
- 二年生の作文・・・事実が詳しくなり、順序よく羅列されている作文
- 三年生の作文・・・長文が多くなり、心に残ったことをもらさず書くようになる。
- 四年生の作文・・・外に向けられていた目が、内に向けられるようになり、内省的な文になってくる。長文が書けなくなってくる。
- 五年生の作文・・・読み手を意識するようになり、文の構成、表現の仕方などを工夫するようになってくる。
- 六年生の作文・・・どんな形の文が読む人の関心をひき、自分の思考感情を訴えるのに効果的であるか工夫するようになる。

二 各学年の形式の系統

- 一年・・・句読点、「」を正しくつける。
- 二年・・・「」をつける。段落をつける。
- 三年・・・段落をつける。はじめ、なか、終わりの見通しを立てて作文する。
- 四年・・・文の山を考えて文を構成する。
- 五、六年・・・詩か散文か。説明、報告、感想、意見などの文。長文、短文。効果を考えて作文する。